

学生から大学教員の道へ



徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
創薬理論化学分野

吉田 達貞 よしだ たつさだ



私は1999年に徳島大学薬学部に入學、2008年に同大学院博士後期課程を修了し、その後、学生時代から所属しておりました研究室(現、創薬理論化学教室 中馬寛教授)に助教として採用されて現在に至っています。故郷の愛媛を旅立ち、徳島の地へと降り立ってから早10余年の月日が流れました。今では徳島の地理にもずいぶん詳しくなった気がします。

さて、この原稿を書いている時点で助教として働きはじめてから1年半が経ちましたが、まだまだひよっこどころか卵の殻をも自分で割れない状態です。しかし、めまぐるしい日々の中少しずつですが、自分の研究だけでなく学生への教育・指導についても考える機会が増えてきました。特に、着任初年度より物理化学関連の実習に携わることとなり、教育が大学で働く上での重要な責務であること、相手に教える・伝えることの難しさを実感しました。私自身の学生時代はお恥ずかしい話ながら、講義にはあまり顔を出す方ではなかったと記憶して

生物学の講義に、歯学部口腔解剖学第二講座の高木知道教授(当時)が来られていました。高木先生の穏やかな人柄や科学に対する真摯な姿勢に感動した私は、専門課程にあがるとすぐに、高木先生の教室に入り浸るようになりました。そのうちに私の研究テーマというのをいただき、高木先生はじめ教室の先生方からいろいろ教えていただくようになりました。高木先生の教室は、今から思えばとても不思議な教室で、月に1度以上は何らかの宴会が開かれていました。宴会といっても、お酒を飲むだけというのではなく、必ずいろいろなテーマで議論が始まります。主にライフサイエンスについての議論が多かったのですが、ときには絵画、美術、外国文化などについても幅広い議論が巻き起こりました。そして、いつも高木先生は他の人の話をよく聞き、違う意見を持っていそうな人の発言を誘導し、議論の活性化を図っておられました。この宴会には教室員だけでなく、他の講座の准教授、講師、助教やその他の職員の方々、大学院生、学部学生も集まり、常に10数名はいました。思えばこのとき、ライフサイエンスのすばらしさ、奥深さなどを実感するとともに、教育者としての高木先生にますます



います。しかし、学生から教員へ立場が反転した今、身に染みて感じるものがあります。それは、どの先生もできるだけ理解しやすい(レベルを下げるという意味ではない)良い講義を行うために様々な工夫と努力をされているということ、理解している人から物事を教わるといえること、如何に有り難いものかということとです。在学生の皆さんには講義にはできるだけ耳を傾けることをお勧めします。



略歴
出身地 愛媛県
2003年 徳島大学薬学部薬学科卒業
2005年 徳島大学大学院 薬学研究科 薬品科学専攻 博士前期課程修了
2008年 徳島大学大学院 薬科学教育部 創薬科学専攻 博士後期課程修了
2008年 徳島大学大学院 ヘルスバイオサイエンス研究部 創薬理論化学分野 助教
免許
2003年 薬剤師免許下付
学位
2008年 薬学博士

大切なのは、人との出会い



鶴見大学歯学部 口腔外科学第二(口腔内科学) 講座

里村 一人 さとむら かずひと

そこで、この原稿を書く機会に、なぜ私がこのように長い間大学に残ってきたのか、そして今また新たな環境で大学人としての人生を続けていこうとしているのか、ということについて少し考えてみることにしました。まず思い当たるのは人との出会いです。私が徳島大学に入學し教養課程でいたころ、

すく(レベルを下げるという意味ではない)良い講義を行うために様々な工夫と努力をされている人から物事を教わるといえること、如何に有り難いものかということとです。在学生の皆さんには講義にはできるだけ耳を傾けることをお勧めします。

最後にありますが、研究あるいはサークル活動やアルバイトに没頭するあまり、自分の将来設計を落着いて考える時間がないという学生の方も少なくないと思います。就職は人生の大きな一つの転機です。大切な時間を有効に使って、自分の能力を最大限に発揮でき、社会に貢献できるやりがいのある仕事を一度じっくりと考えてみてください。

略歴

出身地 徳島県徳島市
昭和63年3月 徳島大学歯学部卒
平成4年3月 徳島大学大学院歯学研究科修了
平成4年4月 徳島大学歯学部 助手
平成7年1月~平成10年1月 米国国立衛生研究所 (NIH, National Institute of Dental and Craniofacial Research) Visiting Fellow (長期出張)
平成13年7月 徳島大学歯学部附属病院 講師
平成15年10月 徳島大学医学部・歯学部附属病院 講師
平成17年1月 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 助教
平成19年4月 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 准教授
平成21年4月 鶴見大学歯学部 教授

徳島大学の皆さん、こんにちは。私は、徳島大学歯学部6期生の一人であり、現在横浜市にある鶴見大学歯学部口腔外科学第二(口腔内科学)講座にいます。と云っても、こちらに赴任したのは今年の4月1日であり、まだまだこちらには慣れていないというのが正直なところです。私は昭和63年に歯学部を卒業後、大学院歯学研究科に進み、学位を取得、その後すぐに当時の歯学部口腔外科学第一講座(現在の口腔顎顔面外科学分野)に入局しました。それから、今年の3月31日まで実に27年間を徳島大学で過ごし、そのうちの17年間が徳島大学に奉職して来ました。考えてみれば、このように長い間、よく大学人として生きてきたものだなあとこの感を禁じ得ません。今年度はじめの転職の際には、その思いをとくに強く感じたものでした。

生物学の講義に、歯学部口腔解剖学第二講座の高木知道教授(当時)が来られていました。高木先生の穏やかな人柄や科学に対する真摯な姿勢に感動した私は、専門課程にあがるとすぐに、高木先生の教室に入り浸るようになりました。そのうちに私の研究テーマというのをいただき、高木先生はじめ教室の先生方からいろいろ教えていただくようになりました。高木先生の教室は、今から思えばとても不思議な教室で、月に1度以上は何らかの宴会が開かれていました。宴会といっても、お酒を飲むだけというのではなく、必ずいろいろなテーマで議論が始まります。主にライフサイエンスについての議論が多かったのですが、ときには絵画、美術、外国文化などについても幅広い議論が巻き起こりました。そして、いつも高木先生は他の人の話をよく聞き、違う意見を持っていそうな人の発言を誘導し、議論の活性化を図っておられました。この宴会には教室員だけでなく、他の講座の准教授、講師、助教やその他の職員の方々、大学院生、学部学生も集まり、常に10数名はいました。思えばこのとき、ライフサイエンスのすばらしさ、奥深さなどを実感するとともに、教育者としての高木先生にますます

す惹かれていったのだと思います。歯学部卒業後は、口腔外科学第一講座の長山勝教授(当時)のもとで、臨床の経験を積ませていただきました。長山先生も穏やかな人柄の方で、在局中を通じて私の好きなように研究を進めさせていただけました。また教室が忙しい中、3年間という長期にわたる海外研修をさせていただき、このときの経験が今の私の大きな財産となっています。まさにこのような経験、人との出会いこそが私が大学で生きていこうと決心した最大のきっかけであったと確信しています。

このように、人との出会いは、ときにその人の人生をも方向づけてしまうほどの力を持つています。徳島大学のみならず今後必ず素晴らしい出会いがあることを心よりお祈りしています。そして、とくに学生のみなさんには、これからの人との出会いをぜひ大切にしてもらいたいと心から思っています。思いつくままに、原稿を綴って来ましたが、今後の徳島大学のますますの発展を祈念いたします。

